病院図書室：東邦大学医学部附属大橋病院図書室

Hospital Library: Ohashi Hospital Library,
School of Medicine, Toho University

東邦大学医学部附属
大橋病院図書室

佐伯 康子*

要 約

当大橋病院図書室をモデルに病院図書室の独自性とその問題点について述べる。とくに小規模であるということの長所と短所、運営面での苦勞と楽しさ、どのようなサービスおよびレファレンスをすべきか、蔵書構成のあり方、職員の意識向上について述べる。

はじめに

病院図書室とはいっても、当大橋病院図書室は東邦大学医学部図書館の分室なので、多くの病院図書室のなかにあってもっとも恵まれた図書室のひとつではないかと思う。資料やレファレンスの面では本館の強力なバック・アップに頼れるし、図書館の相互協力でも医学部図書館同様の恩恵に浴することができ、医学図書館協会主催の研修会にも参加できるし、注意を払ってさえすれば、役に立つ情報を手に入れることもできる。女性職員二人ののんびりしたふんいきで、ともすれば鈍りがちな頭も月一回本館で行われる勉強会で適度な刺激をうけ、あらたな意欲とあせりとをかきたてられもする。

こうした恵まれた環境にあるので、厳しい現実をまのあたりにしておられる多くの病院図書室の方にはまことに申しわけないのだが、病院図書室といえばそのいいところ、楽しいところ、便利なところの方がまず頭に浮かんでくるのである。とはいっても当図書室も病院図書室に共通する悩みを少なからずかかえていることも間違いないところだ。医学部図書館の分室とはいえ、日常の業務内容や職場のふんいきは多くの病院図書室と似かよっているだろうと推測できるので、私としては医学図書館より病院図書室により親近感をいだかずにはいられない。お互いに話し合うチャンスがもてたら、さぞかし共通の

話題、共通の悩みに花が咲くことだろうと思う。

1 最大のそしてどうにもならない欠点、それをいかに補うか

蔵書が少ないということが病院図書室の最大の欠点である。利用者が必要な文献の何%を図書室で充足できているか、はっきりした数字はつかめないがおそらく10%にも満たないのではないかと思う。利用者のもっとも望むこと、つまり必要な文献をすぐその場で見たいという要求に応じることができないのは、たいへん残念ではあるけれど、こればかりはどうにも仕方がない。それならばせめてできるかぎり早くその文献を入手するよう努力したいものだ。

幸い当図書室は医学部図書館の分室という恵まれた立場にあるので、複写申し込みをうけた文献は本館で所蔵しているものなら一兩日で手に入る。また文献に関する問い合わせや図書室のレファレンス・ツールでは処理できない質問も、電話一本で片づけることができる。本館の複写能力に頼っているので本来なら小規模な図書室ではとても消化しきれない量の文献複写申し込みにも応じることができる。これは、言葉につくせないほどありがたい恵まれたことである。

本館への複写依頼は、図書室を支える一方の大黒柱であるがもう一方の大黒柱は、相互貸借申し込みである。これは本館申し込みよりやや少なめだが、第2表にみられるように共にめざましい伸びを示した。現在も増加の一途をたどっている。この伸びを支え、かつ、うながしているのは、くりかえし言うようだが、本館の後だてと各医学図書館の協力につきるといってよい。病院図書室は何ごとにつけても援助なしではまことに心細くたよりない存在で、医学図書館のめざましい進歩のシッポについてゆくことさえできないのである。

* Yasuko SAEKI : Ohashi Hospital Library, School of Medicine, Toho University

表 1

図書室職員数	2人
図書室総延面積	97m ²
蔵書数	4300冊
受入雑誌数	208 タイトル（洋 113, 和 95）
開館時間	平日 午前9時～午後6時 土 午前9時～午後3時
複写設備	ゼロックス 1000型 スライド作成機

表 2

年 度		s. 49年度	s. 50年度	s. 51年度 10月末
調査事項				
開館日数		287日	296日	174日
入館者	人 数	7257人	8718人	6132人
	1 日 平 均	25人	29人	35人
館 外 貸 出	利 用 者 数	517人	737人	454人
	利 用 冊 数	727冊	1016冊	630冊
	1 日平均冊数	2.5冊	3.4冊	3.6冊
文 献 複 写	相 互 貸 借 申 込 件 数	687件	1167件	842件
	大森図書館 複写申込件数	831件	1368件	1132件
	当 図 書 室 複 写 件 数	3729件	4673件	3089件
	当 図 書 室 複 写 枚 数	63872枚	86271枚	59627枚

2 病院図書室は窓口である

手持ちの蔵書ではとうてい利用者の要求を充たすことができないとなれば、病院図書室としてはずうずうしく居直るほか方法はない。つまり徹底して他館のお世話になろうという覚悟を決めることである。そうと決まれば、我が図書室も大医学図書館も、持てる力は同等、（つまり他人のものは自分のものというわけ）になり利用者の申し込みにもそのほとんどに自信を持って応じることができる。国内にない文献は国外に頼める。したがって申し込まれた文献の99%まで確実に手に入るとみてよい。

小さな図書室はその業務のすべてにおいて窓口となる

以外に存在してゆく道はないというのが私の考えであるが、この窓口というやり方に徹底すれば、文献複写以外にもさまざまなサービスが可能になってくる。小図書室の最もいいところは大図書館のようにサービスの範囲を厳しく限定しなくてもよいという点かもしれない。むしろこうしたサービスは、やり方によってはやっかいな問題をひきおこすこともある。しかし反面、実に楽しいこのこもったサービスができるということでもあるのだ。おそらくこの辺の事情は病院図書室勤務の方ならすぐにわかっていただけることと思う。ただしこうした情報屋あるいは時には便利屋のような図書室のサービスが、ゆきすぎず、けじめをもって行われるには、利用者の図書室に対する正しい認識と、相互のコミュニケーションが必須条件であることは言うまでもない。幸い図書室は利用者が大図書館ほど多くはなく、ある程度固定した利用者を相手にしている。したがって、利用者が何を望んでいるかを判断するのも比較的楽なわけで、その場に応じた臨機応変の処置も可能になってくるわけである。

3 病院図書室におけるレファレンス

窓口になれば、としきりに強調はしたものの図書室はなんでもかんでも聞かれてそれに答えていけばよいというのではやりきれない。文献複写申し込みに応ずるのは当然としても文献探索の手段は、利用者に心得ておいて欲しいものである。図書室としてはそのへんのPRはおこたりにようにしたい。それにつけても残念なのはレファレンス・ツールの不足である。これはスペース、予算ともに乏しい病院図書室の共通の悩みであろう。しかしこればかりは他館のお世話になるわけにはいかない。諸事情のゆるせる範囲内ではまんするほかはないが、たとえそうした便利なツールを持つことができなくてもその存在は知っていたいものだ。折あらばどこかの図書館で現物を目にし手にとって、くやしい思いをかみしめておくのはいいことであろう。

さて当大橋病院図書室におけるレファレンス・サービスの1例として“特定主題文献サービス”をあげたいのだが残念ながらまだ正面きって実施していると言えるほど業務として固定化してはいない。本格的に行うには職員の能力不足・人員不足といった状況である。いってみれば片手間風の実施しているにすぎないのだが、それにしても当図書室のレファレンス・ツールではとうてい間にあわず本館の助けに負うところが多い。医学中央雑誌は昭和41年から所蔵しているので、まあまあとしても、

Cumulated Index Medicus (CIM と略す) のないことと Excerpta Medica の所蔵タイトルの少ないことはなんとしてもくやしい。Index Medicus (IM と略す) は 1961 年から現在まで継続して所蔵しているが、できることならそっくり CIM ととりかえたいものである。医学図書館で IM と CIM をどのように使い分けておられるのか興味があるのだが、当図書館では圧倒的に CIM の需要度の方が高い。そうはいっても実際手元にはないものは仕方がないので、現状では年度と件名標目、またあれば副標目を指定しその部分の CIM の複写を本館に依頼している。これは利用者にはたいへんありがたいがられているようだ。しかしこのサービスが増加すると、本館にとってはかなりの負担になるわけで、こうした事情も本格的に実施できない要因になっている。

Excerpta Medica について言えば、従来当図書館で購入しているのは 5 タイトルのみでありそのバック・ナンバーもはなはだ乏しい。したがって現在図書館でこれをつかう利用者はごくまれである。これは CIM のようにコピーでは間にあわずどうしても現物にあたらないといけないので、必要場合は本館から借りるという手段をとっているが、一冊ですむというわけのものではないのでやっかいである。手元があればと思わずにはいられない。

こうした不便をいくらかでも解消しようと当図書館では来年（昭和 52 年）より思いきって IM を CIM にきりかえることにした。IM の利用者もいないわけではないが、両方を購入するというゼイタクはとても許されずスペース的にも無理なので、毎月最新の文献に目を通していた IM 利用者には、また別の手段を講じてご勘弁願うことにしたい。また新規購読雑誌の数をけずって Excerpta Medica をさらに 8 タイトル増やすことにした。加えるタイトルについては利用の多いと思われるものを最優先とした。

4 レファレンス・ツールを作ろう

乏しい予算とスペースしかもたない病院図書館が乏しいレファレンス・ツールしかもてないのは残念ながら仕方ない。それならばせめて手もちの蔵書だけでもフルに活用できるような工夫をしたいものである。当図書館でもその試みはこれからというところだが、実施しているものの中で好評なのが雑誌特集記事索引である。当図書館ではカード式で行っているが最近順天堂大学の例

にならって最近過去 6 年間のものをまとめて冊子にした。これは他の病院へ出張している医師や図書館でカードを見る時間のない利用者の便宜を考えたものである。ひんばんに使う雑誌の目次をコピーして製本しておくのもいいと思う。レファレンス・ツールとまではいかななくてもちょっとした工夫で文献探索がはるかに便利になるようなこともある。たとえば医学中央雑誌に色分けの区別をするとか索引の科目別早見表を作るとか。配架見出しや案内標示も広い意味のレファレンス・ツールといえる。ちょっとした工夫やアイディアこうしたものは、大体において女性の方が得手なものであるが、意外なほどの効果をあらわすのが病院図書館の楽しいところなのである。病院図書館に勤務するものとしては、めざましい医学図書館の発展にはぐれずついてゆく努力はもとよりそれとはまた別に何か役に立つ情報はないか、役に立つ道具はないか、真似の出来そうなことはないかと注意深くかつ貪欲に目を光らせている必要がある。

5 病院図書館における蔵書構成について

何度もうりかえようだが病院図書館においては、蔵書・スペース・予算と三拍子そろって不十分である。そこで収集する書籍・雑誌については細かい配慮が必要となる。収集基準をどこにおくかは難しい問題で図書館それぞれの事情によって異なってくるだろう。当図書館に関していえば、基準というほど一貫した方針とはいえないが、レファレンス・ツールを可能な範囲で収集すること、利用度の高い資料を優先することの二つをあげたいと思う。利用度の高い資料を優先していると蔵書構成が片寄ってくるきらいはあるがそれは仕方のないことだしむしろ当然だとも思う。各病院ではそれぞれ診療科目も違うし医師の研究テーマも違う。図書館でつかわれる資料もおのずと片寄ってくる。その片寄り具合に図書館もある程度まで合わせてよいのではないだろうか考える。むろん、従来の蔵書との一貫性を考慮に入れなければならないが、そればかりにこだわると蔵書以上に貴重なスペースがあまり活用されない資料で占められることになる。

レファレンス・ツールはなんとしても欲しい。これは、利用者と図書館員の資質をともに高めてくれるものであるから。むろん活用出来そうなものを注意深く選択する必要はある。

予算の少いこと以上に頭の痛いのがスペースの問題だ。

蔵書は増やしたいがスペースがどうもという例も多いだろう。当図書室も目下それで悩んでいる最中である。簡単に片付く問題ではないし図書室独自で解決できることでもないで頭が痛い。

おわりに

病院図書室に勤務していると、ある時には「この程度でいいだろう」と思い、またある時には「この程度じゃ

だめだ」とも思う。井の中のカワズも時として胸さわぎを感じるのである。しかしこの胸さわぎは静めないでこう。井の中のカワズで満足しないで、時おり飛び上って外界の広さを目にし意識向上をはかる努力を忘れないようにしたい。

最後にこの誌面をお借りして、日頃ひとかたならぬお世話になりご迷惑をおかけしている各医学図書館相互貸借係の皆様へ深く感謝いたします。

（昭和51年11月16日受付）